

〔萩花集説〕はぎの和名、異稱頗る多し、波ハ疑ギ集集葉葉波ハ義ギ同同芽ハ子ギ同同芳ハ宜ギ、續日本後紀、芽子花和名抄、初日草同、野守草同、古枝草同、秋犀草同、紅染草同、月見草同、藻鹽草同、水カケグサ同、鹿鳴草同、古歌等なり、又漢名ハ、天竺花西湖志、胡枝子救荒本草、隨軍茶同、觀音菊百菊集譜、和血丹植物名物圖考といふ、古來萩の字を假用するハ、字形の會意にして、秋草の較著なるものなれば、恰もつばきに椿の字を用ゆるが如し、赭鞭家の説には、萩ハカハラハ、コ、又アラレギクにして、別物なり、而るに中山傳信錄にも萩の字を用ひ、又周煌琉球國史略に、萩は、枝條纖弱如柳、小葉如榆、亦作品字、九月開花、葉間遍滿紫艷、如匾豆花形とあるは、實にはぎにして、沖繩ハ固より本邦の物名を大約通用し、異ならざるなり、

一萩花の類尠からず、常品及び若干種を左に掲げ、參觀に便す、

通常の品は、諸國山野自生多くして、山萩野萩と云ふ、又人家園庭にも、亦多く栽ゆるものにして、春月宿根より萌芽し、又舊幹よりも新枝を出し、楕圓品字形をなし、秋月莖高さ六七尺、枝を分ち窈窕として、葉間花を著く、紅紫美にして最愛すべし、早く咲くを花戸にて夏萩と云、又一種白萩は、淡雅亦賞すべし、紫白相交り咲は、更紗萩ササなり、木萩ハ葉狭く小にして、其幹年々枯れずして、枝葉を出し、小さき花咲くものにして、即宮城野萩也、宮城野ハ、古來萩の名所にして、此萩小はぎとも云ふ、古歌に、小萩のすゑやちしほなるらんと詠せしものなり、又仙臺の人の話に、宮城野と云ふは、今の仙臺市街より東、山ツ、ジガチカ榴岡の東南に涉り、漠然たる曠野なりしが、先年より追々開墾し、田畝となりたり、又舊藩諸邸の庭際には、宮城野萩の植へ残りたる者もありて、頗る大株となりて、舊幹より萌芽し、花を著くとぞ、又近世、仙臺本荒と呼ぶ所あり、この町内の某邸内には、頗る巨大のものもありと、是即ち木萩にして、諸國山中に産し、常州筑波山、又信州にも多し、コメハギ濃州、チャウバギ勢州等の方言もあり、又大萩から萩とも云、舊幹より毎歲枝上に花を著るれば、秋萩